

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	北村 篤司
主な担当科目	教育心理学_教職A、教養科目A、教育心理学_教職B、教養科目B、教育心理学_教職C、教養科目C、教育心理学_教職D、教養科目D、教育相談法_A、教育相談法_B、教育相談法_C、教育相談法_D、臨床心理学Ⅰ、臨床心理学Ⅱ
2024年の教育目標・授業に臨む姿勢	授業を通じて、学生が基本的な知識や理論、考え方を自分の体験と結び付けながら理解し、一人ひとりが興味関心や問題意識をもって学びを深めるための材料、時間、場を提供する。本年は特に、主体的・能動的に学修に取り組むための環境作りを意識する。具体的には、ICTの活用、ワークシートや提出物の枠組みの工夫、主体的学修度の評価の見直しなどを行い、多様な学修方法を取り入れながら、担当するクラスや個々の学生の状態に適したアプローチを追求する。
2024年の教育に関する自己評価	学生が主体的・能動的に学修に取り組むための環境作りについて、模索し、試行錯誤しながら実践することができた。Teamsを活用した発展学習のための資料や記事の提供、ワークシートやレポートで学生が自分の考えや意見を表現する場所や機会の充実などを試みた。また、一部の科目で主体的学修度の評価方法を見直し、学生の積極的参加をより評価できるようにした結果、学生が自主的に発言する回数が増えた。個々の学生によって、参加のスタイルや動機も異なるため、より多様な方法で主体的に学生が参加できる環境を作っていきたい。
2024年のFD活動に関する自己評価	全体研修会では、現在の大学の置かれている状況や課題などについて幅広く学んだ。グループに分かれての研修や、普段はお話する機会の少ない他の部会・分科会の先生方や職員の方から授業運用や学生への関わり方における困難や工夫について伺い、授業の進め方や学生への支援について、より広い視野で捉え直すことができた。部会・分科会ごとのFD研修会では、資格課程分科会、基礎ゼミ分科会、芸術特別研究分科会のFD研修会に参加し、他の先生方との意見交換を行うことで実践の振り返りを行うことができた。
授業改善のために取り入れた研修内容	全体研修会の後半のグループでの意見交換や、資格課程分科会、基礎ゼミ分科会、芸術特別研究分科会の研修会における、他の先生方の具体的な授業の進め方や学生との関わり方についてのアイデア(評価の仕方やフィードバック、授業への動機づけが高くない学生への対応、サポートが必要な学生への対応など)が参考になった。それらと比較しながら自分が担当する授業における実施方法や学生への関わり方を見直した。

2024 年度(前期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:2902 教員名:北村 篤司

1)アンケート結果に対する所見

教育心理学:4クラスで平均をとり、今学期の全科目平均と比べると Q1(3.51),Q8(3.11)が 0.1 以上低く、Q2(3.92), Q3(3.97),Q6(3.87),Q10(3.81)が 0.1 以上高く、残りはほぼ変わらなかった。授業への満足度は高かったが、Q8 の到達目標の達成の部分は全体平均より低くなっていた。単に知識を学ぶだけでなく、人との関わりに生かせるようになることを目標として掲げており、到達目標の難易度が高く、達成度に対する学生の評価が低くなっている可能性が考えられる。

臨床心理学Ⅰ:全体平均と比較すると、Q8が平均を下回り、Q2,3,7,10は平均を上回っていた。授業時間外の学修時間が 71 分と平均よりも長くなっており、課題作成や復習などの学修に積極的に取り組んでもらえていたのではないかと思われる。

2)要望への対応・改善方策

教育心理学の自由記述では、「コメントを何度も読み上げて下さったのが嬉しかったです」「ビデオなどを観ている時間は授業中の気分転換になりました」「さまざまなツールを使って、分かりやすく楽しく授業をしていてとても良かった」「前回授業の確認、グループワーク、授業内アンケートなどの際、面白いやり方や工夫があって、自分が教師になった時の参考になると思った」などのコメントがあった。最終回の授業でも感想・改善案などを書いてもらっているが、様々なツールやグループワークを活用することで、受講者が楽しさやわかりやすさを感じていることが窺えた。授業でのコメントシートでは、要望として、冷房が寒いときがあった、ということと、レポート課題が 2 回あるので配点をもう少し高くしてほしい、という意見があった。冷暖房の管理をより意識するとともに、レポートについては、回数や成績評価割合を見直したい。

臨床心理学の自由記述では、「精神疾患について動画を用いて説明し、イメージを持ちやすかった。サイトや参考資料の紹介も役に立った」「ワークで、他の人と話し合う時間があって良かった」というコメントがあった。授業でのコメントシートでも、映像やグループワークに言及するものが多く、これらの方法は学修に有用であると考えられる。

3)今後の課題

教育心理学は、来年度メディア授業科目として、対面とオンデマンドの併用型で授業を行う。両方のメリットを上手にかせるように、授業を工夫していくとともに、学修効果について検証したい。どちらの授業についても、引き続き、多様な学修方法を組み合わせ、クラスの状態・雰囲気に応じてアレンジを行い、学生と協働して授業を作っていくことを意識したい。

以 上

2024 年度(前期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

特別支援教育論担当教員

教員コード:3268 教員名:広津侑実子

教員コード:2915 教員名:二俣泉

教員コード:2902 教員名:北村篤司

1)アンケート結果に対する所見

本科目は、4 月に集中講義で実施するため、アンケートの回答が集まりにくく、昨年度は回答者がいなかった。今年度は、UNIPA で回答するようになったことも良かったのか、10 人回答が集まった。

各質問の結果について全科目の平均値と比べると、大きな差はなかったが、Q8 の教育目標の達成度については、3.64 で、平均をかなり上回っていた。概ね、興味や関心を持って授業に臨み、教育目標を達成し、授業に満足しているという回答が多かったが、Q5 の興味や関心を持って出席しているという質問に「思わない」という回答もあり、学生によって差があることも感じられた。

2)要望への対応・改善方策

記述回答では、「介護体験で聾学校に行った時、特別支援教育論で学んだ手話や一人一人の子供への理解が実践的に活かすことができた」という回答があった。受講者全員が介護等体験に参加するわけではないが、特別支援学校での介護等体験と関連が深く、現場での体験を経てより学びを深められると思われる。今後も、学生が介護等体験とのつながりを意識して学びを深められるようにしていきたい。

3)今後の課題

来年度は 100 分授業×7 回になるため、それに合わせ、授業の構成を調整する必要がある。

また、集中講義の日程と授業アンケート実施時期が離れているので、授業アンケートの回答率を高めるよう声かけも続けたい。

以 上

2024 年度(後期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:2902 教員名:北村 篤司

1)アンケート結果に対する所見

教育相談法:月4・月5・月6・水1の4クラス開講だが、4クラスの評価の平均値を出すと、概ね全体の平均と同程度であった。0.1 以上差があった項目は、Q8「授業の到達目標の達成」が平均を 0.1 程度下回り、Q6「授業における工夫」が 0.2 程度高かった。クラスによる差異があり、満足度が高かったクラスは、授業への興味・関心や、到達目標の達成が高くなっており、満足度の低かったクラスはそれらが低いという関連性が見られた。同じ内容の授業でも、受講者やクラスによって意欲や学習スタイルが異なるため、授業内容に興味を薄い学生にも関心をもってもらえるようなアプローチをより工夫していきたい。

臨床心理学Ⅱ:全体平均の数値と比較すると、Q1が 0.1 以上低く、Q2、Q3、Q5、Q6、Q8、Q10 は高くなっており、Q6「授業の工夫」、Q10「満足度」は4点だった。アンケート回答者の授業満足度は高かったことが伺われる。

2)要望への対応・改善方策

教育相談法:自由記述では「教師を目指上で個人的に心配だったこと(発達障害やいじめに関するテーマ)を事実と一緒に教えてくれるので、将来への不安が拭える」「学生との話し合いの場やビデオを観て学ぶ機会も多く、内容が理解しやすかった」等の記載があった。授業の最終回のコメントで、授業の感想・意見を尋ねているが、カフトを用いた復習クイズ、グループワーク、相談場面のロールプレイなどが好評だった。教育場面だけでなく、日常生活での他者との関わりにおいても使えるというコメントもあり、教育場面に加え、日常生活でも活用・実践できるように伝えていくことで、より多くの履修者が興味を持てるように努めたい。

臨床心理学Ⅱの自由記述では、スライドを Teams に残すこと、前時のフィードバックから始めること、質問のしやすさなどについて肯定的なコメントがあった。授業最終回のコメントでは、臨床心理学の概念が相対的に難しい、イントネーションが聞き取りにくいことがあるというコメントもあったので、より伝わりやすく説明できるように意識する。グループワークでの意見交換や体験的な学習が好評なので、対話的に学べる機会を引き続き大切にしたい。

3)今後の課題

教育相談法、臨床心理学Ⅱともに、ワークやロールプレイ、ディスカッションなどが学修において重要となる。これらが苦手な学生や、授業への興味が強くない学生もいるため、できるだけ楽しくワークに取り組んでももらえ、それが授業への関心につながるようにアイスブレイクを設けたり、クラスや学生の特徴に合わせた指示を考えたりして、できるだけ受講者全員が主体的に参加しやすい環境作りに努めたい。

以 上